説教20210808申命記8：1-10　ヨハネ福音書6：37-51

「死んでしまわないように」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

皆さま、おはようございます。この、皆さまという呼びかけは、とても日常的で、その意味を考えるまでもないと思われますが、あえてその意味を考えてみたいと思います。実はこのことは聖書の中身に非常にかかわってくることですので、注意深く聞いていただければと思います。「皆さま」と私は問いかけましたが、これはその字義の通りの「全員の方々」という意味はあまり込められてはいないのです。どちらかと言えば「おのおのがた、おはようございます」と問いかけたほうが正確なのですが、それでは何か時代劇のセリフの様ですし、しっくりきませんね。というわけで、今の世の中では、「皆さま、」という呼びかけが一般的に用いられているのです。

このように、「おのおのがた、」と問いかけるのに「皆さま」と言っている訳ですが、それでも、全員の方々に向けて言っていることには違いありませんので、全員の方々という意味合いも、若干含まれていると言っていいでしょう。このような事情から、「皆さま」というのは、日本語によくあるあいまいな意味合いを醸し出すことになっています。

　ネットで、全員という言葉とみんなという言葉の違いを調べましたら、次のような興味深い意味合いが記されていました。「全員は全ての人で、みんなは、ほぼ全ての人という感じです。」

「ほぼ全ての人」っていったい誰なのでしょうか。このことをあまり考えすぎると病気になってしまいそうですのでやめますが、みんなという言葉に日本語の持つあいまいさが発揮されているということには、留意しておく必要があるでしょう。

　さて今日のヨハネ福音書の聖書箇所には、「皆」という語句が4回使われております。この皆という語句は日常語ではありますが、聖書において大変重要な意味を持っています。皆というのはもとのギリシャ語ではパンタといいます。パンタというのは全てという意味で、突き詰めれば、主なる神の完全性、全能性のことを言っています。そういってもピント来ませんので、パンタが使われています聖句をご紹介しましょう。エフェソの信徒への手紙1章２３節「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」このように、全て、パンタという語句を用いて教会がキリストの全き体であることが述べられているのです。

　このように皆という語句が、パンタすなわち全員ということを意味していることをわきまえておくことは大変重要です。間違っても、この聖書に出てくる皆という語句を、ほぼ全ての人という意味で解釈しないようにいたしましょう。実は聖書の翻訳者も、それに留意されてか、39節でのように「一人も失わないで」という説明書きをわざわざ付加されているのです。が、この「一人も失わないで」という語句はもとのギリシャ語にはないもので、意訳であります。39節にも実はパンタというギリシャ語が用いられておりまして、ギリシャ語に忠実に訳せば、次のようになります。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を皆、終わりの日に復活させることである。」

　さて、皆という言葉と全員という言葉の意味合いの違いを長々と述べてきましたが、そんなことに時間を割く必要があるのですか、と問われそうですが、実はこの違いが重要なのです。

　牧師というのはある教会に、自分の意志によってではなく、神の意思によって遣わされる者です。ですから、牧師は教会において与えられた全員を、分け隔てなく愛し、仕える必要があります。当たり前の話ですが、この全員ということを「みんな」、すなわちほぼ全員ということに置き換えてしまいますと、その牧師はとんでもない間違いを犯し始めることでしょう。

　このように、全員ということと、ほぼ全員ということは全然違うことです。しかし、人間は誰しも不完全な者ですので、この違いを完全にわきまえて考え行動出来る人は一人もいないのです。ただ主なる神だけが、この違いを完全に知っておられる方です。今日の申命記の聖書箇所で、主なる神は、私たち人間が一人も失われないで、オリーブの木と蜜のある良い土地に導き入れられるよう願っておられます。つまり私たちが全員その良い土地に入れらることを願っておられるのです。

　私たちは、この聖書箇所に記されています、荒れ野での４０年の旅路の試練を思い起こすことによって、主なる神の私たちに対する思いの、真剣さ、純真さ、清らかさを思い知るのではないでしょうか。私たちは、自分たちがこのように試練を受けることによって、一人も失われないで、全員が、という主なる神の全き意思を、受け入れられる器へ変えられるのです。

　シンドラーのリストという映画があります。ナチスドイツの時代に、シンドラーというドイツ人実業家が、自分が経営する工場で働くユダヤ人たちが死んでしまわないようにと、逃れる道を計画し実行した実話です。シンドラーという人はもともと商売人で、いわゆる人道主義者ではありませんでした。しかし、当時の世の中では益々、ユダヤ人が迫害され殺されていくようになります。彼は一人の赤い服を着た少女が大人たちに混じって連行されていく姿を見ます。そして後日、収容所でその赤い服を着た少女の遺体を目の当たりにします。この体験からシンドラーはユダヤ人一人一人の命へと、まなざしを向けるようになります。そうしてシンドラーは自分の手の内にあるユダヤ人が一人も失われないで、救われることを願いながらそのリストを作成したのです。

　このようにシンドラーは次第に、主なる神の御心を行うものへとかえられた訳でありますが、後年彼はユダヤ人たちから「一人の人間を救う者は全世界を救う」という格言を送られるのです。

　もともと不完全な私たち人間が、試練を受けたのちに、全員の救いを願うものへとかえられていく過程を、今日のヨハネ福音書の箇所は、パンタ、すなわち全員という語句を用いて厳粛にそして注意深く宣べ伝えています。先ず３７節、「父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない」と主イエスは言われます。「父なる神が与えて下さった人たちは全員、わたしの処にきて誰も追い出されることはない」と言われます。ここには主イエスの固い意思があらあれているでしょう。シンドラーと比較するのもおこがましいですが、それとは比較にならないレベルの意思であることでしょう。「わたしはどんなことがあってもあなたを決して追い出さない」というイエス様の御言葉は本当に私たちの救いとなることでしょう。

ところが、３８節には、今申し上げたことと矛盾することが記されています。「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。」と主イエスは言われます。つまり、「わたしは決して追い出さない」というのは、私イエスの自分の意志ではなく、父なる神の御心すなわち、父なる神の意志であるよ、と主イエスははっきり言われているのです。私たちは、三位一体である神、すなわち父と子が本来一体であることを知っていますので、ここに現れました矛盾点をすぐ解消して理解することが出来ます。そして同時に、一体ではありながら、父と子という異なる位格で現れた主なる神のお計らいの意味をも悟ることが出来るでしょう。「わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。」という御言葉を聞いてすぐ思い出されるのは、あのゲッセマネで主イエスが血の汗を滴らせながら「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」と祈られた主イエスの姿でしょう。この時主イエスは十字架の死を予想しながら、父なる神に「私が死んでしまわないようにしてください」と祈るのです。しかしその間違いではない自分の願いを退けて、父なる神の意志に従うほうを主イエスは選ばれれるのです。ここに真剣で清らかな、三位一体の神の内での試練があります。私たちは、この主なる神の内なる試練が、私たち人間に明示されていることの意味をよく考えてまいりたいと願います。私たちには、先ほど見てきたシンドラーのように、神様の意志が与えられ、それと自分の意志とがいわば一体となって、みこころにかなう良いことが行える時が与えられます。しかし、だからといって、調子に乗って、謙遜さを失い、神の声を聞く耳を失い、それは、全く自分の意志だったなどとおごり高ぶるようになっては、私たちは又罪に引き戻されることになりましょう。

　４０節には父なる神の意志に対する主イエスの徹底的な従順の姿、謙虚さが記されています。「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」つまり、子である私イエスが、父から託された役目は、人々を復活させることであるが、それが実現するのは終わりの日であって、その日まで、私は父なるあなたに従い続けるということを、主イエスは言われているのです。　　　　　　　　　　自分の意志ではなく、あなたの意志に従っていく、というのはどういうことでしょうか。そこには、40年間の荒れ野での試練を経て、エジプトでの隷属状態を脱した、自分とあなとの信頼と親しみに満ちた関係が前提されています。私たちは、父と子の親しい交わりの様に、主イエスと交わっているのです。そしてそこに主イエスに対する従順が生まれます。それは単なる隷属関係ではないのです。４５節で主イエスは「父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。」と言われます。ここには父から親しく聞いて学んだ者は全員、というその師弟関係の深さや親しさが込められているでしょう。このように主なる神から親しくそして深く学ぶものは全員、主イエスを信じるようになります。４７節から「はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」と主イエスは言われます。主イエスは、与えられるパンが自分の肉であると言われます。このことを私たちは信じているのですが、このことは冒頭に申し上げました聖句「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。」ということを思い起こせば、より明らかになることでしょう。私たちは全てにおいて全てを満たしている主イエスの御心を選び続けることで、主イエスと一体となって、終わりの日の復活の命にあずかることが出来るのです。

祈ります

天の父

あなたは、信じる者が一人も失われることなく、永遠の命を得ることができるよう働いておられます。どうか私たちがあなたのその計り知れないご意志を知り、それにあずかる者となさしめてください。

私たちがこの世の浅はかな悦楽のうちに滅びることがないよう、私たちを確かに守ってくださいます様に。そしてあなたのまことの幸いを隣人に告げ知らせていくことが出来ますように。

世の中では、今日でオリンピックも終わり、コロナ化の中で様々な思い、言葉、行いがなされようとしています。どうか私たちが、全ての命の源であるキリストに立ち返り、その御言葉を祈り求める者へとならしめて下さいます様に。

今、苦しみの中にあるものに、あなたの力強い救いの御手を差し伸べて下さい。全員を救おうとされている、あなたの強い覚悟を知り、私たちが常にあなたの前にひざまずき、あなたを賛美することが出来ますように。

父と聖霊と